

帰還

帰還の連絡 昭和二十三年七月下旬頃・ケメロボ収

容所

帰還集結地 ナホトカ港

復員船 遠州丸(貨物船)

舞鶴入港 昭和二十三年八月十二日(二千人復

員)

帰還後の生活

東京電力株式会社に在職中に現役として徴兵され、軍隊およびシベリア抑留期間は休職の取扱いがなされていた。この間(四年間)は会社より給料および賞与は在職者同様に支給を受けておりました。

休職期間の昇給および諸待遇も、在職者同様の処遇であり、東京電力株式会社には深く感謝しておる次第であります。

## つらかった捕虜生活(二)

栃木県 八木澤 旺 二

北満収容所時代

我々石頭候補生隊は、横道河子で武装解除され、応急措置として造られた横道河子の仮捕虜収容所に連行された。この日から長い長い抑留生活が始まったのである。

この仮収容所は、関東軍の被服や糧秣がたくさん積んであった倉庫で、中味の品々は全部ソ連兵が本国に貨車輸送した後に我々日本兵が収容された。毎日数千人、時には百人以上の日本兵が、銃剣をつけたソ連兵に追いまくられながら仮収容所に入って来た。戦闘部隊の兵士の夏服は汗と埃にまみれ、軍靴の形も崩れ、乞食以下の服装であり、だれ一人としてしゃべる者もなく、首をうなだれ前かがみの哀れな収容所入りである。かつての皇軍の意気盛んな気迫はどこにも感ずる

ことが出来なかった。各所の戦闘で逮捕された日本兵の集団であるから団結力もなく、日本軍の組織活動は全く破壊されてしまっていた。ソ連側の意図的なものであろうが、それでも下級将校が三人くらいは下士官、兵の中に交じっていた。収容所の営門をくぐり予定の倉庫前まで来ると、疲れ切った日本兵はそのまま座りこんでしまい、一寸たりとも動こうとしなかった。実は腹も減っており、いっどこで銃殺されるのかも分からないお互いの身の上であるため、昔の皇軍の誇りなどは爪のあかほどもなくなっていた。

大小便はその場で自分の尻を少し上げる程度でたれ流し、そのままであった。これから当分の間は我が家になるという倉庫の周りは臭気ふんぶんたるもので、鼻もちならない惨状になってしまった。生きる魂を失った人間ほど始末に困るものはない。さすがのソ連兵の巡回も日本軍の兵舎（倉庫）には近づかなくなった程である。それでも腹ペコの集団であるので糧秣受領の伝令の声が聞こえると誰の目玉も光り出して来た。勇氣と活力の残っていた兵が五人、ソ連本部の糧

秣受領に重い尻を上げ出かけて行ってくれた。

配給量は、パン一人三百グラム、雑穀が小さな缶詰一缶分であった。三百グラムのパンはたちまちにして餓えた日本兵の胃袋の中に納まってしまったが、雑穀はそうはいかない。飯盒のある兵はよいが、何もないものは缶詰の空缶なり、火にかけ雑穀が炊けるものを集めに出かけた。今までの糞小便のたれ流しの兵とは思えぬ程の元気が出て来た。三百グラムのパンの威力もあつたわけではあるが、鍋がわりに色々な道具が集まって来た。缶詰の空缶、トタン板、汚水を濾過する濾過器のふた、その他、兵はそれぞれ創意工夫しながら雑穀を炊く準備をした。今までに思いもよらなかった活動ぶりである。その勢いで倉庫の羽目板がはずされ、雑穀を炊く薪となった。

八月十八日の昼になり、私も初めて飯らしい飯を少量ながら食べる事が出来たのであった。私達の倉庫の裏には、有刺鉄線が二重に張り巡らされ、その外側には道路が走っていた。私は二人の候補生と、夕食時の糧にしようと思ひ、収容所内に生えているタンポポ

を掘りに出かけた。ちょうどその時、白旗を先頭に掲げ、金モールを胸に飾った参謀達に守られながらしくしくと進む馬上姿の一隊を見ることが出来た。これが関東軍総司令官山田乙三大将であり、日本軍降伏終末の姿であったのである。敗軍の将黙して語らず、ロシア遠征時、冬將軍に敗れたマント姿のナポレオンの馬上姿が私の脳裏に自然に浮かび、目頭が涙でうるんで、急にさびしくなり、憂国の憤怒が胸いっぱい込み上げてくるのを禁じ得なかつたのであつた。

仮收容所の生活も長かつた。ソ連軍に降伏した日本兵は、だれもが、強制労働をさせられるためにソ連領へ連れていかれるなどと考へていた者は一人もいなかった。ソ連兵総指揮官の口からは、今年の冬までには帰国できるとしばしば聞かされていたし、家郷への土産には健康がまず最高のものであるとの自覚から、我々日本兵の生活態度には自治的な制度が育ちはじめ、あたりかまわず大小便をする者もいなくなつてきた。しかし、依然としてソ連の食糧給与も少なく、我々の体力を維持するためにはいろいろな工夫努力が

必要であつた。

我々候補生分隊からも、糧秣受領と称して毎夕方二人の当番候補生が天幕を腰に巻きつけ望楼の監視兵の目を盗んでは有刺鉄線の下を潜り抜け、畑に行つてトウモロコシ、ジャガイモ、カボチャ、枝葉のついたままの大豆等、体にまきつけ持てるだけの食べ物を持つて、暗闇になつてからこっそりと收容所内に戻つて来たものである。戦友たちは空腹を抱え、喉を鳴らして待つていたので、この当番兵たちの責任は重かつた大きなものがあつたのである。あるときは望楼の監視兵に撃たれ死亡した兵もいた。私も清田候補生（鹿児島県出身）と二人で脱走当番になつた。難なく收容所を出られたものの、食べられそうなものはすべてとられてしまつていたので、收容所から遙か彼方まで出動しなければ手に入れることは出来なかつた。夜中の行動で身を隠しながらの活動であるから、食料になるようなものはなかなか見つからなかつた。二人とも休息した途端に深い眠りに落ちこんでしまつた。目が覚めてみると、畑の中は朝日が差しこみ明るくなつていた。こ

れは大変だと思ったが如何ともしがたい。トウモロコシ畑の中には、糧秣受領に來た日本兵が満人の大鎌で殺され、着ている衣服は全部剝奪され、まる裸の死骸がいくつも目に入った。これでは身動きもできない。私達二人は、あとは野となれ山となれと運命を天にまかせてグッスリと深い眠りに入ってしまった。人間の足音に危険を感じて目が覚めた。その足音の主は糧秣受領に脱走して來た仲間の兵士たちであった。私たち二人は、一キロ半もある大豆畑の中を匍匐前進し、有刺鉄線の兎穴から收容所内に潜りこみ、やっとの思いで原隊に返ることが出来た。二人の糧秣の量は、トウモロコシ四十本、ジャガイモ百個くらい、枝豆が数十本程度あり、この大収穫のため分隊一同拍手喝采で、二人の大奮闘に大いなる感謝の拍手をしてくれた。

仮收容所の不潔さは想像以上のものであり、伝染病患者も増えだし、各中隊の病弱者も併せてソ連兵が大きなトラックやジープに患者をいっぱい乗せて野戦病院に運んで行った。

天気の良い日には裸になり、日本兵だれもがシャツ

一枚にしがみついている虱退治に夢中になった。縫い目の間にいる虱を親指と親指の爪の間で押しつぶすと「ピシリ」といい音がして、シャツの縫い目が赤い自分の血で染まることもあった。

この頃から、再び帰国の話が盛り上がりつつ來た。ソ連の新聞にはウラジオストックの港から乗船している四列縦隊に並んだ日本兵の写真が載っていると、隣の收容所では既に帰国の準備に取りかかっていると、仮收容所内では「ダモイ」の話で持ち切りになっていた。ソ連の将校も兵もすぐ帰国させるとの話で、我々は飢え寒さにもかかわらず今までやったこともない軍人体操を朝早くやりだす者も増えてきた。收容所内には、別な意味での活気がみなぎってきた。帰ったら腹いっぱい飯が食えるぞなどと、夜になると食べ物のお国自慢に花を咲かせることが多くなってきた。

私は下野の国（栃木県）の名物「シモツカレ」の話をよくしたものだ。このとき、群馬県では「ピシオ」という、こうじを材料にした郷土の名物があることを知った。

十月十三日、いよいよ我が收容所も帰国するから直ちに帰国準備をせよとのソ連命令に、我々千人の兵士たちは「欣喜雀躍 手の舞い足の踏むところを知らず」のことわざどおり、戦友の肩をたたき抱き合いながらうれし涙を流し喜び勇んだものであった。

その三日後、ソ連兵の拍手に送られながら仮收容所を後にし横道河子の駅に着いた。そこには何十両も連結した有蓋車の貨物車が待っていた。各中隊に有蓋車が配分され、全将兵の乗車が終わると両側の扉が閉ざされ、銃剣をつけたソ連の護衛兵が有蓋車と有蓋車との間の連結器の上に立った。貨車の一団は夜になってから出発した。まるで牛馬を輸送する貨車と同じであるが、それでも祖国日本に帰る夢を見ている兵士たちであるので、喜悅満面だれ一人として不服不満を漏らす者はなかった。すやすやと故郷の夢を結び高いびきをする兵もあつた。ゴトンゴトンと鉄橋を渡る響きがある。これは黒龍江の橋を渡る音だ。これはソ連に完全にだまされた。誰もががじだんだ踏んで口惜しがつたが、すべてが後の祭りになってしまった。残念無念、

なすことを知らず。

收容所は多分ハバロフスク近くのクリドル一〇六收容所だったと思う。シベリアの收容所の主たる労働は、鉄道建設、森林伐採、材木搬送、草原の草刈、建築等だった。

〔編注〕

八木澤旺二氏の手記は、第一巻にも掲載されております。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正八年四月九日

本籍 栃木県塩谷郡今市町

最終学校 昭和十四年三月二十四日 栃木師範二部

卒

昭和十八年三月十七日 専攻科卒

応召 昭和十九年九月八日

昭和二十年 陸軍予科士官学校第十三期

生 砲科

復員 昭和二十四年七月五日

復員後 学校教員（栃木県内の小中学校の教員・

校長を歴任）

定年退職 昭和五十五年四月一日

教育委員会 全抑協今市支部長

（栃木県 野沢 芳夫）

## 思い出

栃木県 宮崎 正 三

栃木県小山市大字中島に、大正十三（一九二四）年

三月二十六日に生まれ、家は農業、養蚕、結城紬にて生計を立てていた。昭和五（一九三〇）年四月、絹尋常高等小学校入校。昭和十三年三月、同校高等二年卒業。同年四月、青年学校入校。昭和十八年三月、青年学校五年卒業しました。

昭和十九年一月、徴用にて日光電気精鋼所にて兵器

生産に精を出した。

昭和十九年十一月二十五日、神奈川県東部八八部隊に関東地方より現役兵六百人が集合しました。

十二月二十七日、一時より面会がB 29のため五分間にて終わってしまいました。

十二月三日、同部隊出発し、横浜駅十七時頃出発いたしました。

十二月五日、早朝下関に着き、門司へ行き、松ヶ江兵舎にて二泊して、門司より日向丸に乗船しました。

十二月八日、朝八時頃出発して十七時頃朝鮮に着いた。妙覚寺に泊まっていました。釜山を十二月十三日、汽車にて出発して、十二月十六日早朝、新京（長春）に着いた。

南嶺の七五八〇部隊にて通信教育を受けた。毎日トントントントの教育でした。一週間に一日教練があった。

昭和二十年四月下旬、牡丹江に行った。七五八〇部隊より五十人くらい、七五八五部隊でした。

五月十日頃、七人が延吉（間島）に第三軍の通信と